墓所としての個人礼拝堂
–フィリッピーノ・リッピ、ベネデット・ダ・マイアーノらによる フィリッポ・ストロッツィ礼拝堂装飾と注文主の意図–

伊藤拓真（日本学術振興会特別研究員）

サンタ・マリア・ノヴェッラ教会フィリッポ・ストロッツィ礼拝堂は、1500 年前後のフィレンツェで、最も豪壮に装飾された埋葬空間のひとつである。礼拝堂奥壁には、ベネデット・ダ・マイアーノによって注文主のための石棺が制作され、その手前の床面には子孫のための墓も準備された。聖母子を表したトンドや、床面装飾、礼拝堂中央に設置された祭壇も、同彫刻家の手になるものである。一方、福音書記者ヨハネ伝、使徒ピリポ伝などを描いたフレスコ画は、フィリッピーノ・リッピによって制作された。リッピはまた、ジェズアーティ会修道士によるステンドグラス制作にも協力している。これ以外にも、現在は失われた祭壇前掛けや木製ベンチなどの備品も提供された。

D・フリードマン（1970）など複数の先行研究でも論じられているように、個々の装飾要素は個別の作品として完結したものではなく、礼拝堂全体の総合的装飾の一環として制作されたと考えられる。なかでも奥壁部分に関しては、墓碑彫刻、壁画、ステンドグラスにまたがる図像プログラムの存在が指摘されている。諸先行研究の間では細部の解釈で未だに見解の相違が見られるが、図像が全体として、礼拝堂内に葬られた注文主の死後の安寧に関わるものであることに疑いはない。統合的図像プログラムを提起した主体として、注文主フィリッポ・ストロッツィや助言者の持つ役割も考察の対象とされてきた。

壁画装飾は 1487 年にリッピに委嘱されているが、近年のザンブラーノらによるモノグラフ（2004）でも再確認されたように、制作の大部分は画家のローマ滞在（1488～93 年）後に行われた。凱旋門を模したと思われる奥壁の構成など、独自な形での古代遺物の再利用は極めて先進的なものであり、リッピのローマ滞在の成果と見なしうる。一方で、ベネデット・ダ・マイアーノによる彫刻作品は装飾開始後程なくして完成し（D・カルル 2006 など参照)、リッピ不在中の 1491 年には注文主が死亡する。礼拝堂の装飾は遺族によって引き継がれたが、注文主の当初の意向が 1503 年に完成する最終的な装飾にどの程度反映されているかは検討の必要がある。

本発表ではこの点に関する議論を進めるため、礼拝堂の持つ注文主の墓所としての機能に注目し同時代の個人礼拝堂の諸事例と比較する。また、注文主を取り巻く政治・経済的状況を概観すると同時に、遺言書に記された内容も分析の対象とすることで、礼拝堂装飾開始当初の注文主の意図を考察する。その結果として、親族が同じ教会内に所有していた別の礼拝堂を注文主が念頭に置いていた可能性を指摘する。以上の議論を通じて、当初想定されていた装飾の内容が、最終的な礼拝堂装飾として実現されていく過程をより流動的なものとして理解する必要性を提起する。